

みなさん。こんにちは。校長通信「おおひら日和」第3号をお届けします。

今回は、「言葉（ことば）の不思議」がテーマです。

私が30代の頃、本島南部にあるA小学校で5年間「ことばの教室」（言語障害特別支援学級）の担任を勤め、次のB小学校では「通級指導教室」の担当を2年間勤めたことがあります。そこでは、言語障害や発達障害のあるたくさんのお子ども達の指導にあたりました。

今回は、そんなお子ども達と出会ったことで、気づかされた「ことば」を獲得するしくみやコミュニケーションが成立するためのしくみについて触れたいと思います。

出会ったお子ども達の様子（例） ↓ こんなお子ども達に出会いました！ ↓



A児：「さしみ」を／タチミ／と言ってしまう（構音障害）

B児：話すときに言葉がつまって、すぐに出てこない（吃音）

C児：単語は知っているが、文章（会話）が文法通りでない（統語障害）

D児：文脈（状況）に合った会話が成り立たない

（自閉症スペクトラム障害：コミュニケーションの困難）

E児：家ではおしゃべりなのに、学校では一言も話さない（選択性緘黙）

F児：機転は利くが、衝動的で注意が散漫（注意欠陥/多動性障害：ADHD）

障がいのお名前は一緒でも、その姿は一人一人違っていました。毎日の授業（指導）は、オーダーメイドに近いものでしたが、一人一人へのアプローチは、とても興味深く、私自身のスキルアップにつながったと強く感じています。

なぜ、この子は、「さしみ」を／タチミ／と言ってしまうのか？という現象を紐解いていく中で、人が言葉を話すときの発音のしくみ（メカニズム）を知りました。単語は知っているのに、うまく話せない子の中に、文法（構文）や助詞の使い方を誤って学習しているなどの背景を知ることもできました。

ところで、お子ども達が「ことば」を身に付け（獲得し）、生活の中で活かしていく（ことばを使っていく）ために、基本的な「話しことばの獲得」には、以下の3つの基盤が必要であると言われています。

わかりやすいWEBサイトがあったので、そこから引用します。

話し言葉の獲得というのは、三つの要素があるということからお話ししましょう。

まず一つ目は、聴覚・構音機能・随意運動の発達など**生物学的基盤**があるのかということです。

二つ目は、言葉の発達の**社会的基盤**についてです。すなわち言葉の発達は乳児期から育ってくるコミュニケーションの力が基盤になっているということです。ですから、皆さんもご存じのとおり、言葉をしゃべり始めてから言葉が発達するのではなく、言葉をしゃべる前からのコミュニケーション発達を基礎として、他者と発語を通してかかわるという人との相互作用によって、言葉は幼児期に獲得されます。生まれたときから身近な大人とのやりとりで生じたコミュニケーションを「言葉の前の言葉」と言うのはこのためです。

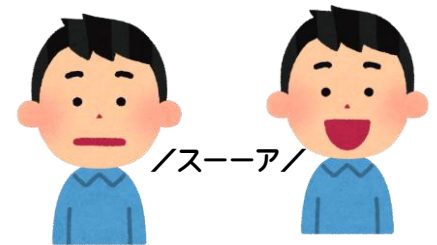
三つ目に、言葉の発達の**認知的基盤**についてです。話し言葉の理解は、乳児期の認知能力の発達と密接に結びついています。すなわち、実際に外界の事物操作を通して「手段と目的」の関係が分かったり、物が目の前になくても消えてしまったわけではなくどこかにあるという「物の永続性」が分かたり、目で見て図形の形が区別できたり、などは言葉の理解に関連する認知発達です。

HP： [話し言葉の獲得 | 母子健康協会 \(glico.com\)](http://glico.com)

一つ目の「生物学的基礎」からわかることは、A児のように「さしみ」という音もわかる、魚の切り身の一部だという認識もある。でも。発音するときにはどうしても／タチミ／と発音してしまうのです。

実は、「さしすせそ」は、舌先を上歯につけないように上げて、空気を細く出す音なんです。例えば「た」という音と「さ」という音を発音してみてください。「た」は舌が上の歯につきますが、「さ」はつきません。サ行の発音にはこの舌先の微妙なコントロールが必要なんです。ですからA児は生物学的に、このサ行を発音する構音（音を作り出す）の働きの部分で、舌先を微妙にコントロールすることが苦手だったことがわかりました。

「サ行」を発音できるように、A児には、ストローを上歯と下歯で軽くはさみ、水の入ったコップに半分ほどストローをいれ、「スー—」と息を出しながらブクブクする練習を繰り返しました。そして、今度は、口を少しだけ開け、上歯と下歯の間から「スー—」と長く息を出す練習をします。最後は、その「スー—」と息を出した直後に／ア／と発音します。「スー—ア」、「スー—ア」、「スーア」、「スア」、「スア」と息を出す長さを段々短くしていきます。すると、／サ／という音が出てくるのです。



これで、実際に何人もの子どもがサ行の発音を克服することができました。

ちなみに、ダウン症候群の子どもたちの生物学的な状態として、高口蓋で、舌が大きいという特徴があり、基本的に発音が不明瞭になりやすいということが言われています。でも、社会性が高く、好奇心旺盛な子どもたちなので、発音は気にせず、どんどんお話しさせた方が一番ステキだと思います。

二つ目の社会的基礎については、この子が生活する環境の中で、豊かな言語環境が必要であるということです。これは、とりたてて「すごい環境を整えなさい！」という意味ではなく、やはり、乳幼児期から周囲のいろいろな環境音や人の声、会話などの環境に置かれるべきということなので、私たちの子ども達は、既に家庭だけではなく学校や児童デイサービスなど、いろいろな環境の中にいるので、特に大きな問題はないものと考えます。

最後の三つ目である「認知的基礎」については、私たちが育てている子ども達に大きな影響を与えていることに気づかされます。聴覚に問題は無い（聴覚障害はない）が、耳から入ったことばの音を脳の中で聞き分ける力（音韻弁別力といいます）が弱いと「リス」と「椅子（いす）」の区別ができないことがあります。そうすると会話のほとんどに聞き違いが生まれ、

／リス／



／イス／



、会話が成り立たないこともあります。

また、記憶する力としても、身の回りにある事物の名称を知っていること（語彙理解）が豊かに蓄えられていないと（覚えたり、思い出す）ことが難しくなります。また、動作ひとつひとつには、いろんな名前がついていることも（覚えたり、思い出す）ことが必要です。

学校が実際に子どもたちへアプローチするのは、二つ目の社会的基盤を豊かにすることと、三つ目の認知的基礎を育てていくことが求められています。

次回も「言葉の不思議」は続きます。認知的基礎を育てるために、学校ががんばっている「授業の工夫」と「自立活動」についてお話ししますね。

お楽しみに！！



「(ボールを)投げる」